

# 第2回 あおもり立志挑戦塾

平成22年6月26日（土）～27日（日）

今年度第2回目の「あおもり立志挑戦塾」は、6月26日～27日、青森公立大学国際交流ハウスで開催しました。講師のカール・ベクス氏（建築デザイナー）は、日本の古民家に魅せられた自らの半生と新潟の小さな集落の人たちとの暮らしを生き生きとお話してくださいました。

父の遺品に、浮世絵など日本の文化に関するいろんなものがいっぱいあって、子どもの頃から、日本にすごく興味を持っていました。私の夢は、いつも、「日本に行きたい」でした。1966年、柔道と空手が強くなりたくて、船に乗って日本に来ました。田舎には私のイメージにピッタリの坪庭を持つ家があり、本当にこれが日本と喜んでいました。日本にいる6年間に、いろんな職人、大工さんと知り合って、ヨーロッパで本物の和風の建築を紹介しようと思い、一度、ドイツに戻りました。日本の材料を皆、コンテナに入れて送り、



職人も行って、皆で組み立てました。ヨーロッパの人たちは、その職人の仕事を見て、本当にびっくりしたんです。匂いの残る4メートルのヒノキの柱や向こうが見えるぐらい<sup>かん</sup>薄く削る技術は、ヨーロッパにありません。亡くなった私の先生に頼んで設計してもらい、公園も造りました。茶室を日本で造ってコンテナに入れて、職人を連れて行ったんです。茅<sup>かや</sup>を持って行くのは大変だから、ドイツの茅屋さんに頼ん

で造ってもらいました。何で日本では茅葺きを禁止しているのでしょうか。素晴らしい材料と素晴らしい技術だし、茅屋さんはまだいっぱいいるのに、仕事が無いから非常に残念です。日本は仕事が無いから茅もない。茅がないと仕事もないから、なかなか大変ですよ。

日本の建物の構造は本当に特殊です。地震に対応したものだと思いますが、素晴らしい技術、すばらしい構造です。私が30年ぐらい前に湯沢へスキーに行った時、まだちゃんと茅葺<sup>かやぶ</sup>きがあったんですよ。「これは何だ?!」と思いました。日本人は、宝石を捨てて、砂利を拾っているみたいです。宝石とは、古い民家。古民家は百年以上も持っているのに、何でこれを捨てて、価値が無いもの、将来は公害問題になるものを造るのでしょうか。

仕事が無いと技術も無くなるし、技術が無くなると良いものもできない。だから、今、本当、最後です。学校だけで技術を教えるのはあまり意味が無いから、造る棟梁<sup>とうりょう</sup>達がいる時、保存しなければダメです。

日本の古民家は確かに住みにくいんです。だから直さなきゃダメです。でも、柱が丈夫だから、簡単に直せます。新しい断熱材を入れたり、ペアガラスを入れたりすればいいのです。屋根は、銅版葺きでもいいし、瓦葺きでもいいけれども、雪があるから難しいですよ。骨組みの材料はすごくいいから、全然捨てる必要はないし、本当にきれいにばらして建て直せばいいと思います。

うちの村、竹所は、少しずつ綺麗になりました。昔38軒だったのですが、私が来た時は9軒しかありませんでした。皆、仕事が無くて、農業でもなかなか食べられないから、東

京や街に出たりしたんですよ。雪を下ろすのが大変だから、すぐに家を壊したんです。

この15～16年間、もう40軒以上造りました。もちろん皆、古民家。ほとんど新潟あたりの古民家を解体して、東京を始めあちこちに持って行きました。古民家の復元って、非常に高額なイメージだったんですけど、そうじゃないんですよ。材料もあるし、解体費はちょっとかかるけど、でも出来上がりで材料の価値から見ると、今の新しい建物よりずっと上です。古い物の中には価値が沢山あるんです。ちょっと土台や柱が腐っても簡単に直せるし、全然捨てる必要が無いんです。私、いつも「古いのは宝石で、宝物で、保存しなければダメですよ。」と言っています。

東山魁夷が「古い家の無い町は思い出が無い人と同じです。」と言いました。すごくいい言葉です。それは、私の考えとピッタリです。もちろん新しい建物は必要です。だからといって、古い物を捨てる必要はないと思います。

古いのと新しいのはよくマッチするから、古いのは保存しなくてはダメだと思います。もちろんいろんな設計士がいて、「これは意味が無い、何で残すんだ」と言う人もいます。けれど、普通の人達はやっぱり古いものがあると安心するんです。何十年経ってもまだあるから懐かしいとなるんです。モダンと古いのがよくマッチするから、古いのもそんなに簡単に捨てる必要が無いんですよ。日本人も外国へ行く時はどこに行きますか？イタリア、フランス、パリ、ロンドンですよ。やっぱり古いものがあるところですよ。



今、竹所<sup>たけどころ</sup>プロジェクトという村おこしの取組をしています。私は6軒を造りました。今、農家は8軒しか残っていないけれど、大体60歳くらいの集落では割合若い人たちで、私もメンバーになり、青年会を作っています。小さい子供が1人もいない。だから街から人を引っ張らないと家が無くなる、村も無くなる。人を引っ張るためには、やっぱりいい家を造らないと。東京に負けないようなお家を造らないと。街を造らないと誰も来ないんです。

だから、井戸を掘ったり、盆踊りをやったり、花を育てたりして、小さいけれどもすごく元気な村になったんです。観光客も見学に来るし。本当に暗さは無くなったんです。皆、暗いイメージだったんですよ。「どうせ皆、いなくなるから。仕事が無いから」、皆は、そう言うんですけど、でも本当は竹所にいて欲しいんですよ。

うちの町の近くに、今は十日町市に合併している松代町があります。そこに110年前に造られた旅館がほとんどそのまま残っていました。もちろん土壁だから、断熱効果はほとんど無かったし、直しても綺麗じゃなくて、お客さんもおそらく来なかつたろうから、去年の5月で営業を止めたい、家を潰したいと。「材料は要りませんか。」と私に聞いてきました。私はこの建物を欲しいから、「土地付きで譲ってくれれば」。どうしてそう思ったか。村の人達と集まる場所を作りたいというのが、私の夢でした。村にはなかなか作れないから、町の中だったら逆にいろんな人が来てすごくいいんじゃないかと思ったんです。そのオーナーは、喜んで私に譲ってくれました。それを今、綺麗に直しています。まだ終わってないけれど、7月17日にオープンします。現在は、裏の新しい建物を壊して、雪を置く場を作っています。雪は機械で裏までもって行って、夏はビアガーデンとか集まる場所に使おうと思っているんですよ。ここを使って、来月17日にビアガーデンをやります。たまにはドイツ風でやろうと思っているんです。皆、本当に「やりましょう、やりましょう」。やっぱり元気にやらないとダメですよ。

文化はどこにあるか？やっぱり田舎。日本は、やっぱり田舎だと思います。